



特集

ネットワークの力

仲間とつながる 何かが生まれる

インターネットの急速な普及と並行してネットワークということばが広く使われるようになり、人と人のつながりをも指し示すようになりました。さまざまな分野・領域で、何か共通の問題意識や使命感を核に、人と人がつながり、ネットワークが生まれ、ときには社会の変革につながるほどの大きな力を生み出します。

さまざまなネットワークのなかには、学校の教師が中心となるものも数多くあります。教科指導をはじめ、日々の業務に忙しい教師は、学校や地域を超えてつながることにどんな意味を見出しているのでしょうか。

この特集では、学校教師が関わるいろいろなネットワークの事例を紹介し、ネットワークの意義と役割について考えてみました。



特集 p.1

ネットワークの力
仲間とつながる 何かが生まれる

地域でのネットワークづくり
つながりから広がるつながり
つながることで勇気百倍
仲間とのやりとりから生まれたもの
素敵な仲間が人生を豊かにする
新しい風が新たな視点をもたらす
教師ネットワークが生み出す力

シリーズ p.10

Close up! TJFウェブサイト ③

TJFニュース p.12

中韓合同の教師研修を初めて開催
第3回高校生サマーキャンプを実施
「つながる」をオーストラリアで発表 ほか

お知らせ p.16

事務所を移転します ほか

**TJFは
事務所を
移転します**

2009年12月1日(火)より、TJFは事務所を文京区音羽(東京)に移します。移転先は、p.16をご参照ください。



地域での ネットワークづくり

松山美彦……北海道登別明日中等教育学校教諭

★ p.2～p.7 に登場する団体についての詳細は、p.9 に掲載しています。

今から15年ほど前、国語の教員をめざしていた私は、日本語教師として中国に2年半滞在した経験が生かされると考え、大阪府の高校で非常勤講師として中国語を教え始めました。勤務校には中国語教師は私ひとりで、その頃唯一だった高校生向けの中国語教科書を手にしてみても、何をどう教えていいのかよくわかりませんでした。そんなとき、高等学校中国語教育研究会（以下、高中研。p.9参照）が全国大会や支部活動を通して中国語教育に携わる仲間同士で、情報交換などを行っているということを知りました。薫にもすすがる思いで関西支部の集まりに参加し、資料や情報を得て、授業に役立てました。このときほど、ネットワークの存在をありがたかったと思っことはありませんでした。

仲間の支えがあってこそできたこと

数年後、北海道の高校に国語科教員として採用されましたが、当時、初任校には中国語の講座が開設されておらず、授業で中国語を教えることができなくなってしまいました。それならばと、中国語の必修クラブを立ち上げ、会話を教えたり、地域に住む中国人留学生と交流の機会を設けたりしました。二つめの勤務校では、この経験を生かし、カリキュラムに中国語を入れてもらうよう学校側に働きかけ、勤務して2年めとなる2001年に選択科目の一つとして中国語の講座を開設することができました。中国語の講座が開設できたのは、各地で試行錯誤を重ねながら中国語教育に取り組んでいる仲間がいるということ、国際文化フォーラム発行の高校中国語教師向けの情報誌『小溪』で知り、また、過去に日本語を教えた中国の知人たちから、若い高校生が国際理解を深めるための一助として中国語教育を広めてほしいと励まされたからにはほかなりません。

広い北海道で点と点をつなぐ

北海道で中国語教師のネットワークをつくりたいという思いはあったのですが、その当時、道内の中国語実施校は全高校数350のうち10校にも満たず、広大な面積を有する北海道は、全道規模のネットワークをつくるのは容易ではありませんでした。私が勤務していた共和高等学校は札幌からバスで2時間以上かかり、複数の実施校のある札幌に行って、

ネットワークのことを相談したいと思ってもすぐに行けるような状況ではありませんでした。やはり時期尚早かと考えていたのですが、同じように北海道のネットワークの必要性を感じていた札幌の先生と連絡を取り合うなかで、「つくるなら早いほうがいい」ということになり、手分けして中国語教育を実施していると思われる高校の担当者の名前を調べ、2004年3月に恐る恐る集まりを呼びかけてみたところ、多くの先生方が集まり、高中研北海道支部を立ち上げ、活動していくことで意見が一致しました。

支部誕生から今年で6年め。「まずは情報交換から」ということで始め、2005年には高等学校中国語教育全国大会の運営を担い、札幌市で100名が参加する高中研全国大会を開催しました。できたてほやほやの支部には大役でしたが、この経験がネットワークの求心力ともなりました。現在は、道内で中国語を学んでいる高校生の学習発表会の企画、運営などを中心にメーリングリストで意見交換などをしながらの活動が続いています。



今では恒例行事となった高校生中国語発表会。

ネットワークと私の関わり

北海道支部のネットワークは、他校の先生方の実践や考えを知り、自分の実践を見つめなおす貴重な機会を私に与えてくれ、時に勇気づけ励ましてくれます。そして、何よりも私たち教師のつながりの場を提供してくれていることが、地域を超えた生徒同士のつながりを生んでいます。

私の現在の勤務校である北海道登別明日中等教育学校は北海道で初めての一体型中高一貫校です。中学高校を通してどのように中国語教育を展開していくべきか。これからは情報提供を受けるだけでなく、自らの教育実践をネットワークの仲間たちに発信していきたいと考えています。

【まつやま・よしひこ】



つながりから 広がるつながり

潮田康之……神奈川県立横浜国際高等学校教諭

私は神奈川県派遣の日本語教師として中国瀋陽市にある遼寧大学で2年を過ごした後、1997年に帰国し、9月に神奈川県立神奈川総合高等学校に国語の教師として着任しました。着任後1年経った頃、中国語を担当している教師から県内の中国語担当者の集まりがあるから出席してみないかと誘われ、参加しました。その後、その教師の異動に伴い、中国語の講座はネイティブの教師が教えることとなり、講座のお世話係の役目が私にまわってきたため、引き続き中国語担当者の集まりに参加するようになりました。

この集まりに、私と同じような神奈川県派遣の日本語教師経験者で、中国語教育に関わっている人の参加が増え、やがてその人たちが中心的な役割を果たすようになっていきました。そして、事務局の設置や定例会の開催など、組織としての形が整い、2002年からは、「神奈川県高等学校中国語教育研究会（以下、しんちゅうけん神中研。p9参照）」として活動するようになりました。

ネットワークの広がり

私自身は中国語を教えていたわけではなかったのですが、定例会で実践報告があっても実感としてわからないもどかしさがありました。それでもこれまでに開催された60回の定例会のうち、初期の頃を除いてすべて出席しています。もちろん、定例会に出席すれば中国のことを語り合える仲間がいるということもありましたが、私自身が瀋陽で2年を過ごす間に感じた「中国語・中国のおもしろさ」を、生徒に実感してもらう機会を提供するために、この会が役に立つと感じているからです。

定例会では、生徒や教師が参加できる催しなどに関する情報を参加者間で共有することができます。一人と知り合うと、知り合ったその人のつながりでまた次の人が参加するようになり、そのつながりが広がって、いちばん参加者が多かったときには30人近くになりました。人の縁とは不思議なもので、私が遼寧大学で日本語を教えた生徒がその後日本に留学し、そのうちふたりが神奈川県の高校で中国語を教えるようになりました。うちひとりは今や神中研の役員になっています。こうして人が増えることによって、自然と多くの情報がもたらされるようになりました。

会費も徴収しない状況でしたから、予算は当然ありませんが、いくつかの活動が生まれました。一つは毎年10月に開催する「中国語学習高校生交流会」、もう一つは毎年1月に行われる「中華街フィールドワーク」です。どちらも毎年50～60人の生徒が参加しています。前者は、神奈川県日中友好協会のサポートを得て実施しています。後者は横浜華僑婦女会などの協力を得て、毎年餃子やちまきづくり、太極拳など体験プログラムを実施しています。こうした外部機関との連携を可能にしたのは、メンバーそれぞれが持っているネットワークと、「生徒たちに中国語を学習する楽しさを感じてほしい」という共通した思いです。



中華街フィールドワークの一コマ。太極拳と餃子づくりに挑戦する高校生。

新しい世代へのバトンタッチに向けて

神中研としての活動を開始してすでに8年になります。情報交換の場、中国や中国語のことを語り合う場としては十分その使命を果たしていると思うのですが、私としては神中研を教育研究活動の場にしたいという思いが強くあります。

もう一つ神中研が直面している最大の課題は、私を含めてここまで中核となってきたメンバー、いわゆる第一世代の高齢化です。ここで次の世代に譲らないと組織の存続が危うくなります。今や、第一世代が教えた生徒たちが、教壇に立つ時代になりました。フレッシュな世代にバトンタッチできることを期待し、今しばらく神中研という場を維持していきたいと思っています。

【うしおだ・やすゆき】



つながることで 勇気百倍

李貞榮……大阪府立佐野工科高等学校教諭

2006年10月、大阪府・堺市公立学校教員採用試験の最終発表がインターネットで行われました。そこに私の受験番号がありました。感動で目がうるみましました。初めて高等学校の韓国・朝鮮語教員採用試験★注を受けた1992年から数えて足かけ15年、3回目の挑戦で手にした嬉しい知らせでした。

すぐに高等学校韓国朝鮮語教育ネットワーク(以下、JAKEHS。p.9参照)のメーリングリストで仲間知らせたと、長い間同じ職場で働いていた仲間、毎日顔を合わせる仲間、大学時代に韓国語を教えてくれた恩師、メールのみでやりとりをしている仲間から、お祝いのメールが送られてきました。その時届いたメールは、すべてプリントアウトして、ノートにはりつけてあります。仕事で辛いことや悩みがあるときには、必ずこのノートを見ます。自分には支えてくれている仲間がいる、初心に戻って頑張ろうという気持ちになれるからです。

JAKEHSとの出会い

私が初めて韓国語教員研修会というものに参加したのは1998年のことです。韓国・朝鮮語教師を対象とする全国規模の研修を実施するのでぜひ参加してくださいという文書が、主催者から届きました。非常勤で韓国・朝鮮語を教えている私が、招かれて東京まで研修を受けに行く、それはまさに夢のような出来事でした。

研修会場である大学セミナー・ハウスには、全国から34名の韓国語を担当する教師が集まり、2日間にわたって模擬授業や発表が行われました。夜も遅くまで活気あふれる議論が続きました。私にとっては、すべてが目から鱗が落ちるような、学ぶことの多い研修でした。同じ学校に同じ教科の教員がいるわけでもなく、教科書もなく、韓国・朝鮮語を教えるうえでの悩みを共有したり共感したりする仲間がいるのを知らずにいた私にとって、ベテランである先生方の話を聞くことがとても大きな力になりました。

翌年、JAKEHSが発足し、その後、定期的に西日本ブロックのモイム(集まり)が開催されるようになりました。2、3ヵ月に1度集まるメンバーは、パワフルなアジュンマ(日本語でいうおばさん)たちが中心で、損得勘定抜きに助け合う仲間ばかりです。参加するたびに、生徒についての悩みを相談したり、学校運営上のアドバイスを受けて、自分では気づかない授

業の工夫や、地域で行われる韓国関係のいろいろなイベントの情報などを得たり、いつも新たな力をもらっています。教材の貸し借りもよくします。そしてモイム終了後には毎回のようにコリアタウンに繰り出し、韓国料理を食べながら学校のことだけでなく、自分の家庭のことや、人生の悩みごとまで、話はつきません。JAKEHSのメンバーであること自体が刺激的であり、楽しくもあり、人生でこんなに居心地のよい場所はない、一生涯付き合っていける仲間に出会えたと思っています。

自分を励ましてくれるつながり

JAKEHSも発足から10年。その間には、メンバー同士の関係が濃くなる時と薄くなる時があったように思います。韓国語教育に関する情報や研修の案内もJAKEHS以外のところからも入ってくるようになりました。

今後この組織をどう運営していくべきかは仲間たちと模索中です。この組織に育ててもらった私は、自分がもらったものを次の世代に伝えなければいけないと考えています。

メーリングリストでの、ひとつのアドバイスや情報が、自分の悩みをすぐに解決してくれたありがたさ、離れていても、一緒に悩みに共感してくれたり、勇気を与えてくれたりする仲間とのつながり、これからはしっかり育て、引き継いでいきたいと考えています。

【イ・ジョンヨン】

★注：韓国・朝鮮語教員採用試験を行っているのは、全国でも大阪府のみ。試験は毎年行われるわけではなく、これまで8回実施されたのみである。



モイムは授業の工夫などの情報交換で盛り上がる。



仲間とのやりとりから 生まれたもの

長渡陽一……立教新座高等学校講師

高等学校韓国朝鮮語教育ネットワーク(以下、JAKEHS。p.9参照)が母体になって、この夏に韓国語の教室用アクティビティ集『すぐに使える韓国語アクティビティ45』が生まれました。これま

でも、JAKEHSを母体に、高校生が韓国でホームステイするときなどに使うための単語集『ハングル@ホームステイ』(2005年)や、高校での授業のための『高等学校の中国語と韓国朝鮮語 学習のめやす(試行版)』(2007年)★注が生まれています。



JAKEHSとの出会い

私は1995年から立教新座高校で「朝鮮語」と「アラビア語」を教えてきましたが、最初の5年ほどはまったく孤独な環境で授業を行っていました。文字の習得が比較的難しい二つの言語を扱うなかで、文字なしで入門会話を導入する方法や、『アクティビティ45』にも収めた「単語カルタ」を開発したのもこの時期でした。いろいろ開発したり、工夫したりしていくと、これを発表して人の反応や意見を聞きたくくなりました。そうしなければ、これがいいものなのか、世間では当たり前なのかもわからないからです。自分の授業の「位置」を知りたかったのです。そんなとき、JAKEHS会員の山下誠さん(神奈川県立鶴見総合高等学校)から誘いの電話があり、JAKEHSに飛び込んだのでした。

仲間と韓国語を教えることの意味を考える

JAKEHSには、同じ悩み、違う悩み、いろいろな考えや理想をもっている人がいました。そうしたなかで、高校の授業で「教える単語」を選定したいと考えていた会員と意気投合し、作業を始めました。ところが、そもそも何のために韓国語の単語を教えるのか、何のために韓国語を教えるのかということを仲間と考えていくうちに、「教える単語」ではなく、生徒が「使う単語」が必要なのだと考えるようになりました。なかでも、ホームステイなどで「交流するときに使う単語」が必要だと考え、『ハングル@ホームステイ』を開発しました。

また、2005年、横浜でのJAKEHS全国大会で、「文法はどうするのか」という問題が意識化され、文法を教えることの意義を再考しました。その結果、「どの文法項目をいつ教えるか」という問題は、学習者が場所や相手に応じて自分の意思を伝えたり、相手から受け取ったりすることができるようにするという目標の下にあるという結論に至りました。

仲間と授業のやり方を模索

自己紹介ができる、趣味を語ることができる、道を尋ねることができる、などの目標を、学習の進度に合わせて設定していくことで一年間の授業を組み立て、単語や文法は、その材料として配置していくのです。こうすると、一回一回の授業や、そのなかの作業を何のためにやっているのか、教師側も生徒側も理解して進むことができるのです。このような目標を「コミュニケーション能力指標」と名づけ、具体的に例示したのが『高等学校の中国語と韓国朝鮮語 学習のめやす(試行版)』です。例えば、「趣味を語ることができる」という目標を設定し、そのために必要な単語や文法を配置したら、今度は、授業を具体的にどのようにすればいいのかということに問題の焦点は移っていきました。この問題を解決するために、教師たちは、それぞれでアクティビティ(教室活動)を工夫していました。それを持ち寄って、整理したのが『アクティビティ45』です。

自分の位置を確認

JAKEHSというネットワークがあったからこそ、自分の授業を報告したり人の報告を聞いたりすることで、自分の立つ位置を確認することができました。また、問題点やアイデアを話し合うことで、新しい授業のやり方が生まれ、発展してきました。私の授業も、こうして毎年、毎回、変わってきています。教師間のこのようなやりとり(コミュニケーション)から上で紹介した教材が生まれてきたのです。

[ながと・よういち]

★注：TJFが文部科学省の委嘱事業(平成17～18年度)として進めた「高等学校における外国語教育の目標・内容・方法に関する研究」の成果物。コミュニケーション能力の到達指標と、指標にもとづいて作成された授業案や年間指導計画案が掲載されている。日本の高校の中国語教育と韓国語教育の発展を願う高校・大学の教師が中心となって作成した。



素敵な仲間が 人生を豊かにする

谷井隆夫……国際教育活動ネットワーク／REX-NET代表・大阪府立住吉高等学校教頭

REX-NET：文部科学省ほかの派遣で海外の小中高校で日本語教師を経験した教員が帰国後立ち上げたもので、日本の国際教育・外国語教育に貢献するために活動している。詳細はp.9参照。

REXプログラム(p.9参照)という海外派遣事業のことを知った1992年、このプログラムにぜひ参加したいと思いました。それまでに、欧米人に日本語を教えたり、アジア各国の留学生たちの世話をしたりする機会がたくさんありました。かれらから見た日本は、歴史と文化の豊かな国というプラスの面がある半面、経済至上主義の国、歴史を顧みない国という負の面もあるのだと感じていました。彼らとの付き合いのなかで、いつかより良い国際関係を築いていく役割を自分が果たしたいと思うようになっていきました。REXプログラムで自分が派遣教員に選ばれたら、きっといい仕事ができるだろうという自信と意欲をもっていました。また、その派遣経験を糧に国際教育に貢献したいという使命感も抱いていました。

同じ意欲と使命感をもつ仲間との出会い

1994年に大阪府のREX派遣教員に選ばれ、東京外国語大学での事前研修に参加した際に、全国から集まった21人のメンバーに出会いました。私と同じ意欲と使命感を抱いている素晴らしい連中でした。このプログラムへの参加を希望し、各県から選抜されたメンバーに共通する「気合い」があふれていたのです。そして、3ヶ月の事前研修を共に受けた後、一斉に世界各地の派遣先に向かい日本語教育に取り組みました。帰国後、それぞれのメンバーは各地で活躍し、その成果は各種の報道や研究紀要、REX-NETのウェブサイトなどで公開されています。

同期のメンバーとのつながりから得るもの

毎年4月になると、同期のメンバー21人全員に「変わりはないですか」とメールを送ります。すると、日本中、世界中から、近況や異動を知らせるメールが返信されてきます。私はそれを整理して皆さんに送り返すことで、1年に1度同期のメンバーによるネットワークのメンテナンスをするのです。同期のうちの一人は、派遣期間を終えて帰国した数年後に、派遣先のニュージーランドに戻り、永住権を取って現地で日本語を教えています。今年は彼から「ゆとり教育の終わりが以前のカリキュラムに戻るのだとしたら、日本は取り残されていくような気がします。こちらでは教育のパラダイムシフ

トが強調されていて、教える内容も教え方も大きな変化が求められています」というメッセージが返ってきました。彼が紹介してくれた資料によると、パラダイムシフトとは「認識の転換」という意味で、教育では、旧来の指導法や到達目標を変化させるべきであることを指しています。例えば数十年前と比べて、インターネットの普及や世界人口の増加により、情報量が飛躍的に増え、情報の質も多様化しています。従来と同じ発想の教育のままではいけない、というのです。これが、同期のメンバーによるネットワークからもらった今年一番大きな衝撃でした。私は今も毎日このことを考えています。

大阪メンバーの期を超えたつながり

大阪のREXメンバーは毎年夏に、これから派遣される方の壮行会を兼ねた夕食会を開催しています。1993年度の派遣から今年度の派遣まで、実に16年の時間差がありますが、この夕食会では期を超えた情報交換や近況報告で盛り上がりがあります。大阪のREXメンバーの連携は、現在は若手への応援が中心ですが、いずれ力を結集する機会が来るだろうと予感しています。

全国規模のネットワーク

2003年にはREX経験者を中心に全国規模の国際教育活動ネットワーク／REX-NETが生まれました。REX-NETでは、ウェブサイトの運営、全国大会の開催、REX事前研修への協力などさまざまな活動を行っています。



REX-NETのウェブサイト→<http://rexnet.loops.jp/>

意欲と使命感を共有できる仲間と知り合えることは、それ自体が人生を豊かにします。派遣時期や地域の差を超えて、素敵な仲間とつながっていること自体に大きな価値があります。私自身、各地のメンバーから刺激をもらい、各地のメンバーに情報を提供し、顔を合わす度に元気をもらっています。

[たにい・たかお]



新しい風が 新たな視点をもたらす

住川明子……跡見学園中学校高等学校教諭

獲得研：学習者が主体となり、全身で学ぶ「獲得型」授業の研究・開発をめざし、小学校から大学までの教員が中心となって活動している。詳細はp.9参照。

獲得型教育研究会（以下、獲得研）に所属して今年で4年めを迎えました。獲得研の活動を振り返りながら、「ネットワークを築く＝つながる」ことの意味を考えてみたいと思います。

ネットワークがネットワークを生む

私にとっては、獲得研の前身的存在である米国理解研究会もつながりを生む大切な研究会でした。誰にでもできるアクティビティを考案して米国理解を深めようという一つの目的を達したこのグループと、本格的に演劇を学んでこられた先生方が、渡部淳日本大学教授の仲介で新たにつながり、獲得研という新しいグループが誕生しました。つながることで、新しい刺激的なネットワークが生まれたわけです。

新しいものの見方の発見

「演劇」と無縁に生きてきた私は、獲得研の活動が始まった当初、「ドラマの技法を学校教育のあらゆる場面に活用する」と聞いて「何をどうするの」とパニック状態になりました。しかし月1回の研究会を重ねていくうちに、ホットシーティング★注1、フリーズフレーム★注2、ロールプレイング★注3など、実にたくさんのドラマの技法があることを知りました。演劇に携わってきた方々との出会いにより新しいものの見方を発見し、恥ずかしがらずに表現できるという、それまでの自分とは違った自分を発見し、皆で向上していくことができます。

活発な議論

獲得研は年に2回ほど合宿もします。この合宿は、机も椅子もない部屋で行われます。そこでは参加者全員が全身を使って表現することを体験します。回を重ねる度にスーッと動けるようになっていく自分に気がつきます。また、一部屋に集う夜のミーティングは圧巻です。感想、反省、演劇談義……とにかく議論が続きます。徹夜で議論し合う仲間もいます。試行錯誤を重ねながら同じ目的に向かって進んでいく仲間の姿は、新し



獲得研の合宿。全身を使って表現することを体験。

い試みをするにあたってとても心強く、励みとなります。

率直な意見・情報交換

メンバーとは、メーリングリストを使って意見交換をしています。現在、2010年に刊行予定の出版物の原稿をメンバーで分担して執筆していますが、自分が執筆したものをメーリングリストで送ると、メンバーから容赦のないコメントが寄せられます。これも仲間同士、信頼関係ができていからこそできることです。また、教科指導に限らず、他校ではどのような学校行事を行っているのか、生徒をいかに伸ばしていくのか、校内の研修はどうしているのかなど、研究会とは直接関係のないことの情報交換もしています。

あうん 阿吽の呼吸

獲得研の仲間が運営委員をして開催しているものに、都内の高校生を対象とする「高校生意見発表会」があります。この発表会では、高校生が自由な表現方法で自分の意見を発表し、将来の夢を語ります。当日の運営委員の動きの見事なこと。事前に役割分担が決まっていますが、誰が指示を出すでもなく、阿吽の呼吸で物事が運びます。「ここに〇〇さんがいてこれをやってくれるといいな」と思っていると、実際にそうしているメンバーがいるのです。まさに「つながる」とはこういうことだと感じる瞬間です。

信頼できる仲間

教員は日々忙しく、つつい自校のことにのみ目が向きがちです。他校の先生方とつながりをもつことによって普段とは違う風に触れることができ、人間の幅も広がっていくように感じます。また、信頼関係を保ちながら、仲間と議論を深めることによって、自分の考えにブレが生じていないか確かめることもできます。「何かあったらこの人に聞いてみよう」、そんな仲間がたくさんいることも幸せの一つなのです。

【すみかわ・あきこ】

★注1：教師や生徒が登場人物となり、テキストの内容に関連した質問のやりとりをする手法。

★注2：映画の一コマのように、生徒たちがそれぞれの役割をもった人物となり、象徴的なシーンの静止画をグループで表現する手法。

★注3：自分ではないほかの人、ものを演じる手法。

教師ネットワークが 生み出す力

「ネットワークをつくる」＝「人とつながる」ことは、どのような意味をもつのでしょうか。また、ネットワークを形成する人は、そこにどんな意味を見出しているのでしょうか。

本特集で取り上げた事例のなかで、長渡氏〔p.5〕は「同じ悩み、違う悩み、いろいろな考え、理想をもっている仲間の形成」がネットワークの真髄だとしています。仲間といっしょに教科書や教師のための活動集を作ること、さらにその過程で新しい視点を獲得できることに大きな意味を感じています。

松山氏〔p.2〕は、「中国のことを語れる仲間がいる」場があり、そういった場で「生徒や教師が参加できる催しなどの情報を共有すること」に大きな意味があり、さらに「ひとりと知り合うと、知り合ったその人のつながりでまた次の人に」つながり、それに比例して集まる情報も増えていくことに意義があるといっています。

また、潮田氏〔p.3〕は、ネットワークを通じて他校の教師の実践を知ることが、「自分の実践を見直す貴重な機会」となり、その結果、地域を超えて生徒がつながることになると語っています。

谷井氏〔p.6〕、住川氏〔p.7〕は、教師が学校外とつながりをもつことで「人間の幅が広がり」、仲間との議論を通じて「自分の考えにブレがないか確かめることができ」、さらに新しい情報とともに刺激をもらえるといっています。教育への「意欲と使命感を共有できる素敵な仲間」とつながること自体に大きな価値を見出しています。

仲間とつながる意味

今回紹介した教師ネットワークの特徴は、上述したように、学校や地域を超えて似通った問題意識をもつ「仲間」とつながっているということであり、これがネットワークの原点となっています。

教師ネットワークは、教師自身がそれぞれの悩み、関心、考え、問題意識、使命感、理想を共有できる仲間と出会い、助け合い、啓発し合い、つながることであり、仲間意識が教師に安心感と活力をもたらすのです。

そして、次の段階として、教師ネットワークは、多数の教師間で教育関連の情報を交換したり、共同で教材や授業設計の開発などの教育実践活動を行ったり、他の学校・地域との交流を促進しています。

さらに、この力の結集を原点としながらゆるやかな組織体となったネットワークは、より広域の教育活動の推進、教育環境の変革への働きかけという役割が期待されるようになります。

組織体としてのネットワークが抱える課題

インターネットが普及した今日、以前に比べるとネットワークを維持しやすくなっています。実際、多くのネットワークでは、メーリングリストなどを活用して、情報交換などを活発に行っています。

しかし、一方で、ネットワークを希求する思いを維持し、その思いを形にし、さらに発展させていくのは、そう容易なことではありません。ゆるやかな組織体としてのネットワークが活動を深めていくにしたがって、ネットワークに期待されるものが大きくなる分、その困難さは増していきます。

日常の教科指導や生活指導、進路指導などに加えて、数多くの校内行事や会合等への対応、煩雑な事務など多忙を極める教師には、やりたくてもできない状況が生まれてくるのです。それ相当の意欲と力をもつメンバーが核となり、それが引き継がれていかなければ、組織体としてのネットワーク力は弱体化することになります。これが教師ネットワークを継続的に発展させていく上での大きな課題なのです。

教師ネットワークが果たす役割

TJFが結成以前から深く関わっている高等学校韓国朝鮮語教育ネットワーク（以下、JAKEHS）の結成時とその後の活動を、一例として見てみます。

1998年に高等学校韓国語教師研修会が開催され、高校で韓国語を教えている教師が初めて一堂に会しました。学校で孤軍奮闘していた韓国語教師は、同じ悩みを抱えながら授業をしている仲間がいることを確認しました。そして、仲

間とのつながりを求める声の一つとなり、翌年、JAKEHSが誕生しました。JAKEHSの誕生によって、それまでひとりで悩みを抱えていた教師、あるいは個人的なつながりを通じて問題意識を共有していた教師が、多くの教師と情報を共有したり交換したりできるようになり、他校の韓国語教師とのつながりによって教科書などの出版物を発行することが可能になりました。さらには高校と大学の韓国語教育関係者間のつながりへと発展し、高校教育における韓国語教育の意味を問い直し、それを広く提示するなど、韓国語教育全体にとって大きな意味のあることを行いました。

JAKEHSは現在もいろいろな取り組みを行っています、設立時の状況とは異なり、いろいろなところから情報が入手できるようになった現在、今後、この組織をどう運営していくべきなのかをメンバーは模索しているところだといえます。

それでも、李氏 [p.4] が「(JAKEHSに) 育ててもらった私は、自分がもらったものを次の世代に伝えなければいけないと考えています」というように、ネットワークを維持していこうという思いを多くの教師が抱いています。それは、ネットワークがもつ力に大きな意義を見出しているからにはほかなりません。

団体紹介

■名称

1. 結成年
2. 対象と会員数
3. 目的
4. 具体的な活動
5. URL

■高等学校中国語教育研究会 (高中研)

1. 1982年
2. 日本の高校における中国語教育関係者。約200名。
3. 会員間の交流、親睦を図るとともに、調査・研究、教員研修、学習者奨励プログラムの実施を通じて高校中国語教育の充実、発展を図る。
4. 毎年1回、高等学校中国語教育全国大会を開催するほか、八つの支部(北海道、関東、北陸、東海、関西、中国・四国、九州、沖縄)が、それぞれ研究会や高校生のための中国語学習発表会などを開催している。1987年に高校生を対象とした初の教科書『高校中国語』を発行。後に、関西支部がその改訂版および改訂新版を制作した。現在は『高校中国語2』(仮称)の制作に取り組んでいる。
5. <http://www.kochuken.org/>

■神奈川県高等学校中国語教育研究会 (神中研)

1. 2002年
2. 神奈川県を中心とした高校中国語教育関係者。
3. 中国語や中国語教育に関する研究、講演会や研究発表会などの活動を通じて、神奈川県の高等学校における中国語教育関係者相互の啓発および親睦を図るとともに、県内の中国語教育の発展・振興をめざす。
4. 年に6回の定例研究会を実施し、授業実践報告・情報交換などを行うほか、毎年1回神奈川県内で中国語を学習している高校生を対象とする交流会と横浜中華街での体験型ワークショップを実施している。
5. <http://www.geocities.jp/sincyuken/>

■高等学校韓国朝鮮語教育ネットワーク (JAKEHS)

1. 1999年
2. 高校の韓国語教育関係者や、その教育に関心をもつ人。約150名。

3. 高校における韓国語教育の発展、拡充や、そのための情報交換や情報共有を図る。
4. メーリングリストを通じ、会員相互の相談や質問、提案、催しの案内などの情報交換を行っている。東京、横浜、大阪、兵庫、福岡、鹿児島などの地域で定例会や研究会を開催したり、年1回、全国の高校の韓国語教師を主な対象として研修会を実施している。また、天理大学と神田外語大学への働きかけにより、両大学での韓国語教師免許取得講座が実現した。このほか『韓国語アクティビティ45』、高校用教科書『好きやねんハングル』などを発行している。
5. <http://sites.google.com/site/jakehshome/>

■国際教育活動ネットワーク/REX-NET

1. 2003年
2. REXプログラム(文部科学省が総務省、地方自治体と協力し、日本の公立中学・高等学校の若手教員を海外の日本語教育を行っている中等教育機関に派遣する「外国教育施設日本語指導教員派遣事業」)の参加教員を中心に結成。
3. 国際教育、外国語教育、日本語教育を柱に、おもに国内外の小中高校生の教育に貢献する。
4. ウェブサイトやメーリングリストを通じて実践事例などの情報交換、REXプログラムの事前研修への協力などを行っている。また、2004年度から2007年度まで、東京、神奈川、大阪などで国際教育シンポジウムを開催した。
5. <http://rexnet.loops.jp/>

■獲得型教育研究会 (獲得研)

1. 2006年
2. 小学校から大学までの教員および教育関係者。約40名。
3. “教師による知識注入”型授業ではなく、“学習者が主体となり、全身で学ぶ”獲得型授業に関わるアクティビティとスキルについて研究し、その体系化を図る。
4. 月1回の研究会、年1~2回の合宿を実施し、獲得型教育に携わる教師の(自己)研修プログラムの開発、普及にあたっている。また、研究活動を通じて、会員の資質向上をめざし、研究成果を出版物として公開している。2010年2月にメンバーの執筆になる『学びを交えるドラマの手法』を刊行予定。
5. <http://www.kakutokuken.jp/>



高校生が写した写真を集めた 高校生のフォトフォトフォト!

<http://www.tjf.or.jp/photophotophoto/>

等身大の高校生の姿を知ることができる、五つのコーナーがあります。

The Way We Are II (日本語/英語)

<http://www.tjf.or.jp/thewayweare2/jp/>

TjFが後援している「よみうり写真大賞」(読売新聞社主催)の高校生部門「フォト&エッセーの部」の入賞作品を掲載しています。高校生が2~5枚以内の写真と文章で、自分の身近にいる高校生の姿を表現したものです。これらの作品から、高校生の日常生活の様子、友だちへの思い、日々の悩みや不安など、彼らの素顔や気持ちが伝わってきます。

この「フォト&エッセーの部」は、TjFが1997年から2006年まで実施した「高校生のフォトメッセージコンテスト」を継承して、2008年に新しく設けられました。



高校生写真ギャラリー (日本語/英語)

<http://www.tjf.or.jp/photogallery/>

日本各地の高校の写真部や美術部などで活躍している生徒が写した写真と説明文を掲載しています。これらの作品から、日本の高校生や周りの人たちが、どんなところで、どのように暮らしているかを知ることができます。

2009年10月現在、5校から提供していただいた130点以上の作品を掲載しています。今後も新しい作品を掲載していく予定です。



高校生のフォトメッセージコンテスト (日本語)

1997年から2006年までの10年間、海外の高校生に日本の高校生の素顔を伝えようと実施したコンテスト。日本の高校生に、身近な高校生の姿を5枚の写真と文章で表現してもらいました。208作品を掲載しています。

The Way We Are (日本語/英語)

「高校生のフォトメッセージコンテスト」の応募作品から選んだ100点以上の作品を、英語と日本語の文章や音声を付けて紹介しています。

Focus on Japan 2007 (日本語/英語/中国語/韓国語)

「高校生のフォトメッセージコンテスト」10周年を記念して、2007年夏に、写真撮影を通じて世界の高校生の交流を図ることを目的としたプロジェクト「Focus on Japan 2007」を実施しました。参加者の作品のほか、かれらのプロフィール、作品制作の様子などを掲載しています。

★本サイトでは、撮影者および被写体から掲載の許可を得た作品を掲載しています。



昨年開催された第30回の入賞作品一覧より。



撮影者からのメッセージのほか、主人公についてのコメントを閲覧できる。



各作品をクリックすると、キャプションが表示される。「スタジオにて。1番大好きなキャラの格好をする主人公。彼女の目力にはいつも引き込まれそうになる」

千葉県立船橋高等学校 定時制課程 写真部



参加校のトップページには、学校や写真部の活動紹介などが掲載されている。右側にある作品の項目をクリックすると、作品一覧を閲覧できる。



かけがえのない家族の写真から、私の思いを感じてほしい ……ミユ

写真を始めたのは高校に入ってからです。最初は、写真部に入ることも考えていませんでしたし、カメラも持っていませんでした。写真部の顧問の先生に誘われてなんとなく見学に行き、いつのまにか部員になっていたのです。

いまでは、妹を中心に家族をモデルにした写真を多く撮るようになりました。役者をめざしている妹は、とても表情が豊かで、撮っている私もとにかく楽しい！

家族は、私という人間について、そして写真を撮ることについて、誰よりも理解してくれている存在です。だからこそ、自然体でリラックスして撮影できるのかもしれない。私の写真を通じて、日常の何気ない出来事やふだん意識していない家族の存在が、とてもかけがえのないものだという感謝の気持ちをくみ取ってもらえると嬉しいのです。

高校生写真ギャラリーに写真を掲載して、日本だけでなく世界に発信されることがどれほどすごいことか、正直まだ実感はありません。今後も、見る人に何かを感じ取ってもらえるような写真、とくに社会を風刺するようなテーマで写真を撮ってみたいと思っています。だからといって重苦しいものではなく、いかにユーモラスに表現できるか挑戦していくつもりです。



「13歳の君に たす、いち」 ミユ

この写真は、妹の誕生日前日に、一緒に散歩した海岸で撮影しました。ふだん受験勉強で疲れた顔をしている妹が、このときばかりはとてもいきいきとした顔をしていたので、その表情を切り取りたかったのです。いろいろな角度から、瞬間瞬間の表情を捉えるよう、砂浜に寝転がったり、走ったりしながら撮影してみました。



「シュガーミッツマイファミリー」 ミユ

写真を始めてから、家族はよくおもしろいテーマを探してくれたり、モデル(妹)の服などについて、いろいろとアドバイスしてくれたりします。この時も、たくさんのお菓子を家族全員で並べ、幸せそうな妹を撮影しました。家族のチームワークのよさと幸せな空気を、少しでも感じ取ってもらえたら嬉しいです。

★ミユさんは、第33回全国高等学校総合文化祭写真部門(2009年)で、妹をモデルにした上記とは別の作品で奨励賞を受賞しました。

TJFニュース

「TJFニュース」では、TJF（国際文化フォーラム）の活動報告や、事業に関連するさまざまな動きをニュースとしてまとめ、お伝えしていきます。

■中国語・韓国語教育関連プログラム 中韓合同の教師研修を初めて開催

TJFは、桜美林大学と共催で2009年高等学校中国語・韓国語教師研修を8月1日（土）から5日（水）まで、桜美林大学PFC（神奈川県）で開催しました。この研修は、駐日中国大使館教育処と駐日韓国大使館韓国文化院の特別共催、文部科学省、駐日韓国文化院世宗学堂の後援、かめのり財団の助成を得ました。本研修は、中国語教師と韓国語教師を対象とする研修を合同で行ったこと、中国語や韓国語の教師だけでなく、ほかの外国語の教師も対象に外国語教育についての講義を行ったこと、さらには授業案づくりに取り組むなど実践的であると同時に、外国語教育のあり方について考える研修であったという点で画期的なものでした。

前半2日間の講義には、中国語や韓国語の教師、ほかに英語、ドイツ語、フランス語、日本語を担当する教師約100名が参加しました。中央教育審議会外国語専門部会委員等を歴任され、学習指導要領にも詳しい吉田研作教授（上智大学）に、英語教育を中心に日本の初等中等教育における外国語教育の目標と課題についてお話しいただきました。

また、米国ナショナル・スタンダード★注1の日本語作成委員長を務めた當作靖彦教授（カリフォルニア大学サンディエゴ校）に、効果的な外国語学習、外国語教育における文化・言語能力



（上）熱心に講師の話に耳を傾ける研修生。（下）グループワーク風景。

の評価、コミュニケーション能力養成のための外国語教育カリキュラムの作成などについて講義していただきました。

いずれの講義も刺激的な内容で、1日目だけの予定だった参加者から、急遽2日目の受講希望が出るほどでした。

後半3日間は、高校で中国語およ

び韓国語を担当する教師を対象に、前半2日間の講義をふまえて、授業案を作成するという実践的なカリキュラムを組みました。中国語、韓国語別にグループに分かれ、各言語担当の5名の講師陣による指導のもと、グループごとに「学習のめやす」★注2を活用した、具体的な授業案づくりに取り組み、最終日にはポスターセッションによる成果発表・検討を行いました。グループワークを初めて体験する人には戸惑いもあったようですが、日頃孤独な作業となりがちな授業案づくりを仲間との協働作業で行い、作成した授業案について忌憚なく意見交換を行いました。

外国語教育のあり方を再考

5日間の研修を通して、言語そのもの（例：語彙、文法規則など）を授業の中心にするのではなく、職業、買い物、社会といったテーマを授業の中心に据えると同時に、言語活動の達成目標を設定したうえで、テーマの内容に関する語彙・文法・表現を入れていくという教育方法や、そういった教育方法の背景にある考え方や理論の概要などを参加者で共有することができました。加えてそのような教育方法を取り入れている「学習のめやす」を活用し、授業を設計していく具体的な方法についてグループワークを通して考える機会を提供することもできました。

また、中国語と韓国語を中心に、外国語教育を担当する教師がことばの垣根を越えて、人としての成長を促す外国語教育のあり方について共に考え、外国語教師のネットワークを形成することができたことは大きな成果だったといえます。より多くの教師とこういった場を共有したいという参加者の声は、事務局スタッフにとって大変うれしいものでした。

研修終了後に参加者から寄せられた、「内容が多すぎて消化しきれなかった」「もう少しゆっくりやってほしい」「用語がわかりにくかった」といった声を踏まえ、来年度の研修を企画、実施していきたいと考えています。（中野敦）

★注1：ナショナル・スタンダード（Standards for Foreign Language Learning for the 21st Century）とは、五つの学習目標と11の学習基準から成り立つ、連邦政府からの支援を得て全米外国語教育協会（ACTFL）を中心に作成された学習基準のこと。

★注2：TJFで検討・開発を進めている高等学校における中国語および韓国語教育の教育目標や内容、方法について、共通に参照できる枠組みのこと。<http://www.tjf.or.jp/jp/publication/wakaru/meyasu2007v00.html>

■中国語教育関連プログラム

第3回高校生サマーキャンプを実施

TJFは、中国語を学ぶ日本の高校生92名と引率者8名、計100名の参加を得て、第3回「中国語を学ぶ日本の高校生のための短期中国研修」(別称「漢語橋:日本の高校生サマーキャンプ」)を、7月25日(土)から8月3日(月)の日程で北京にて実施しました。この研修は、中国国家漢弁が主催するもので、文部科学省の協力、在中国日本国大使館、駐日本中国大使館の後援を得ています。

これまでと同様、「中国語ネイティブによる語学研修と中国語を使った実践活動」「高校生をはじめとする現地の人びとの交流」「市内見学を通じての社会学習」「中国文化体験」の4項をプログラムの骨子に据えながら、今回はいくつかの新しい試みを織り込みました。

一つめは、北京経済技術開発区実験学校^{★注}に受け入れ校となってもらったことで、前半の6泊7日は、参加者は同校の宿舎に寝泊まりしながら、同校の教師による中国語や文化体験の授業を受け、在校生代表と交流するなど、1ヵ所にとどまって、勉強、交流を行うことができました。これによって、効率的な運営ができたばかりでなく、参加者も寄宿生活を体験できました。

二つめは、念願だった家庭訪問の実施です。参加者は10グループに分かれて、受け入れ校の教職員や生徒の家庭を訪問し、授業で学習した中国語を使って交流しました。全員、たくさんの果物やお菓子が歓迎され、お土産までいただいたようです。訪問後の全体報告会では「歓迎されて本当にうれしかった」「中国人の優しさにふれた」「日本に関係のあるも

のが家の中であってびっくり」「僕の家よりもずっと広くてきれいだ」「お子さんのピアノや琴の演奏を聞かせてもらって、教育熱心であることがわかった」などの感想が聞かれました。

三つめは、現地の高校生との交流で、日中の高校生がケンタッキーのハンバーガーを一緒に食べながら、日本の高校生から事前に寄せられた多くの質問に現地の高校生が答えるという試みでした。質問は学校生活、趣味、流行、日本および日本人についての印象や興味、母国中国についての認識など、多岐にわたっていました。中国の高校生から日本の高校生に質問する時間がとれず残念でしたが、連絡先を交換した生徒も多いことから、個別の交流が続くものと期待しています。

今回は、新型インフルエンザの影響が心配されるなか、中国側主催機関および受け入れ校の英断のおかげで、予定どおり実施することができました。また、家庭訪問や受け入れ校の高校生との交流に関しても快く引き受けてくれました。今後もインフルエンザ対策をはじめ安全にプログラムを実施していくためにさまざまな対策を講じながら、中国語を学ぶ、より多くの日本の高校生に研修の機会を提供していきたいと考えています。

(長江春子)

★注:小中高一貫教育を実施する私立校で、国際コース、芸術コース、留学生コースを併設し、在校生は1,700人、1,500人を収容する寄宿舎を備える大規模な学校。

■中高校生の交流関連プログラム

「つながる」をオーストラリアで発表

TJFは、シドニーで開催された全豪現代言語教師会(AFMLTA)の全国大会(7月9~12日)と豪州日本研究大会・日本語教育国際研究大会(JSAA-ICJLE 2009、7月13~16日)に参加しました。

AFMLTAでは、スミス・ヒル高校(ニューサウスウェールズ州)の日本語教師キャロリン・デイヴィッド氏と共同で「つながる」の成果や課題、日本語の授業と関連づけた使い方について発表しました。

JSAA-ICJLE 2009では、国際交流基金シドニー日本文化センターが主催するパネルセッション「ILTL (Intercultural Language Teaching and Learning) ^{★注}をオーストラリアの学校の日本語教育にどう取り入れるか」に参加しました。このセッシ



日中高校生交流会では、約30名の現地高校生が参加し、意見交換やスポーツ交流を行った。

ョンでは、現在オーストラリアの言語教育で主流となっているILTLを教師研修、教室活動、遠隔地教育という三つの分野でどのように取り入れ、実践しているか、



AFMLTAで「つながる」を使った実践について発表するデイヴィッド氏。

国際交流基金シドニー日本文化センター、TJFとキャロリン・デイヴィッド氏、西オーストラリア州教育省がそれぞれ発表しました。TJFとデイヴィッド氏は、教室活動においてILTLを実践する一つの方法として「つながる」を使った事例を紹介しました。また、それぞれの機関や教師がILTLに取り組んでいくなかで、どのように互いに協力しあったのか、あるいは今後どのような協力が可能なのかディスカッションを行いました。

(室中直美)

★注：ILTLの詳細は、『国際文化フォーラム通信』第81号のp.8を参照。http://www.tjf.or.jp/newsletter/pdf_jp/F81

■日本の高校中国語教育関連プログラム

15名の教師が吉林大学の研修に参加

TJFと中国教育部、文部科学省との共催で「高等学校中国語担当教員研修」が、7月27日(月)から8月8日(土)まで、吉林大学(中国長春市)で実施されました。この研修は、2004年から5ヵ年計画で始めたものでしたが、第5回の研修後に行ったアンケート調査で、ニーズがまだあることがわかったことから、吉林大学と協議のうえ、継続することを決めました。



研修生の作文から生まれた、波乱万丈の半生を送ったパンダの物語を上演。

今回は現地集合・解散とし、研修会場までの交通費は本人が負担することになったため、参加希望者が少ないのではないかと心配しましたが、11都府県から15名の教師が吉林大学に集まりました。この研修では、参加者の中国語のコミュニケーション力の向上と教授法習得をめざすとともに、中国人家庭の訪問や長春市内の中学校の日本語教師との交流等を通じて中国語理解を深めることをめざしました。参加者は、「このメンバーで研修に参加できてよかった」ということばを残して研修会場を後にしました。6期生の強い連帯感を促したのは、成果発表会で披露した中国語劇でした。脚本、衣装はすべて手作り、每晚遅くまで全員が練習に参加しました。研修で学んだ内容を盛り込んだこの劇は、講師たちの喝采を浴び、吉林大学教授で主任講師の劉富華氏に、「来年から中国語劇を成果発表の課題にする」と言わしめたほどでした。

参加者からは、連絡のために研修前に設けたメーリングリストに、帰国後もたびたび投稿があります。メールの一つひとつから、研修で刺激を受け、引き続き中国語の勉強に励みたいという決意や、高校の中国語教育の発展に尽くしたいといった決意が伝わってきます。

(水口景子)

■韓国語教育関連プログラム

韓国語教師研修を初めて九州で開催

TJFと駐日韓国大使館韓国文化院、韓国国際交流財団との共催で、韓国語教師研修を8月6日(木)から11日(火)まで九州産業大学で実施しました。この研修は、高校、大学や市民講座等で韓国語を教えているか、将来教えたいと考えている人を対象に、韓国語の教授法の向上を目的に実施されたものです。2004年から始まったこの研修は、これまでに京都、東京、大阪で開催してきましたが、今回初めて九州での開催となりました。全受講者44名のうち、九州在住の受講者が6割を超え、地域内および他地域の講師との交流の機会を提供することができました。

受講者の所属機関は大学と市民講座がそれぞれ約3割、中高校の教員は受講者全体の2割でした。母語別の受講者は日本語が約6割、韓国語が4割でした。来年度は、名古屋での開催を予定しています。受講者の所属機関なども考慮に入れながら、すでにカリキュラム案の検討に入っており、

模擬授業の実習を含む、従来よりも授業実践に重きをおいた構成を検討しています。

(小栗章)

■大連の日本語教育関連プロジェクト 『好朋友 ともだち』第5冊が完成

TJFが2006年から大連教育学院とともに編集・制作に取り組んできた中国初の第二外国語教育用日本語教科書『好朋友 ともだち』の第5冊(試行版)が9月に発行され(B5判/128頁/カラー/5,300部)、これによって全5冊シリーズが完成しました。



ストーリー漫画を軸にした高橋美佳と大連の中学生5人をめぐる友情物語も第5冊をもってついに完結です。美佳たち6人は旅行先をめぐって口論した末、大連郊外にりんご狩りに行き、友情をさらに深めます。しかし、美佳は父親の仕事の都合で横浜に戻るようになります。友だちの王志鵬が、大連空港を飛び立つ美佳を、以前美佳の家で見つけた『竹取物語』のかぐや姫と重ねるシーンには誰もが胸を打たれるでしょう。

第5冊では、漫画のストーリーに沿って「旅行の計画」や「別れ」などのトピックを取り上げ、人と人との関係を紡ぐことについて考えさせる学習活動を紹介しています。巻頭のグラビアページでは、多くの写真を用いて、世界各地の多国籍、多民族の人びとが参加する国際会議やボランティア活動などの現場を紹介するとともに、そこで活動するさまざまな年齢、職業の人びとを紹介し、協力の大切さ、つきあっていくことの楽しさや難しさ、対等な関係で共存していることを伝えています。

「人間関係の温暖化」と「多文化共生」の理念のもと2006年から続けてきた編集・制作はひとまず終了しますが、今後は完成版発行に向けて改訂作業に着手していきます。

(森本雄心)

■TJFウェブサイト トップページをリニューアルしました

TJFウェブサイトの主なコンテンツを、小中高校生の交流、日本語教育、中国語教育、韓国語教育の四つに分け、目的

に応じて関連するページや情報にアクセスできるよう、トップページ左側のメニューボタンを改訂しました。さらに、これらのメニューから入ったページに、こういった情報があるのか、一瞥してわかるように各コンテンツの概要をリストで示しました。



Google検索の機能を利用して、TJFウェブサイト内のページ検索、画像検索ができるようになりました。画面右上の検索欄に、探したい情報に関するキーワードを入力すると、関連するページや画像のリストが表示されます。

TJFウェブサイトがより使いやすくなるよう、今後も改善を続けていきます。

(森亮介)

実施事業一覧 (2009年7月・8月・9月)

- 全豪現代言語教師会 (AFMLTA) 全国大会にて「つながる」発表 (7月/豪州シドニー)
- 豪州日本研究大会・日本語教育国際研究大会 (JSAA-ICJLE 2009) にて「つながる」発表 (7月/豪州シドニー)
- 中国語を学ぶ日本の高校生のための短期中国研修実施 (7~8月/中国・北京)
- 平成21年度高等学校中国語担当教員研修共催 (7~8月、中国・長春)
- 第2回クムホ・アジアナ杯「話してみよう韓国語」高校生大会韓国研修ツアーおよび韓国語研修共催 (7~8月/韓国・ソウル、キョンジュほか)
- 『国際文化フォーラム通信』第83号発行 (7月)
- 『小溪』No.41発行 (7月)
- 2009年高等学校中国語・韓国語教師研修共催 (8月/神奈川県)
- 2009年外国語担当教員セミナー共催 (8月/神奈川県)
- 韓国語教師研修2009共催 (8月/福岡)
- 「つながる」教師向けワークショップ実施 (8月/大阪)
- 『Takarabako』no.21発行 (9月)
- 『ひだまり』第40号発行 (9月)
- 『事業報告2008—2009』発行 (9月)

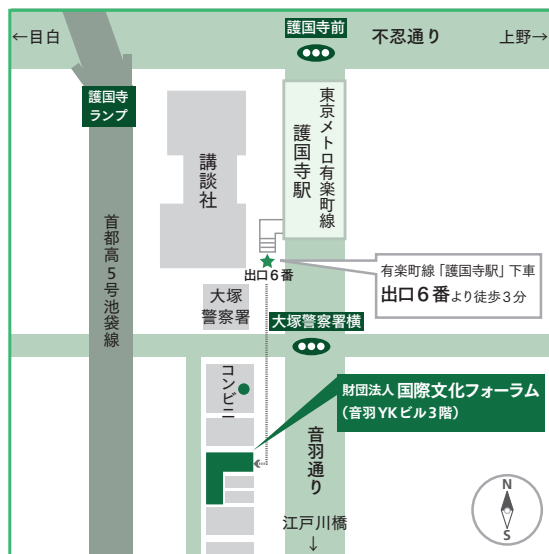
事務所を移転します

TJFは、このたび事務所を下記に移すことになりました。移転日は11月28日(土)、新事務所での業務開始は12月1日(火)です。

これを機に職員一同気持ちを新たに、公益財団法人への移行認定をめざし、これまで以上に質の高い公益活動を継続していきたいと考えています。今後とも一層のご支援ご協力をよろしくお願いいたします。

移転先

〒112-0013 東京都文京区音羽1-17-14 音羽YKビル3階
TEL 03-5981-5226 FAX 03-5981-5227



第3回クムホ・アジアナ杯「話してみよう韓国語」高校生大会参加者募集中!

日本の高校生が韓国語と韓国文化に対する関心を高め、韓国語と日本語による表現力や伝達力を向上させることを目的に開催しているコンテストです。クムホ・アジアナ文化財団、駐日韓国大使館韓国文化院、日中韓文化交流フォーラム、TJFがこれを共催しています。ただいま第3回大会の参加者を募集しています。

応募資格: 本選時に日本の高等学校またはそれに準ずる専修学校や各種学校、高等専門学校の1~3年で、20歳未満であること。

部門: 韓国語スピーチ部門、韓国語スキット部門、日本語エッセイ部門
締め切り: 2010年1月22日(金)

締め切り後に予選審査を実施し、本選出場者を決定します。

本選: 2010年3月13日(土)13時~(韓国文化院ハンマダンホールにて)

大会の詳細については、www.asiana.co.jp/speech をご覧になるか、TJFまでお問い合わせください(メールの場合は hanakan@tjf.or.jp まで。電話の場合は03-5322-5211、12月1日以降は03-5981-5226まで)。

第31回よみうり写真大賞高校生部門「フォト&エッセーの部」作品募集中!

TJFが1997年から2006年まで開催した「高校生のフォトメッセージコンテスト」を、読売新聞社が継承して2008年から実施しているもので、TJFはこれを後援しています。締め切りが迫っていますが、たくさんの応募をお待ちしています。

応募資格: 2009年4月時点で、日本の高等学校またはそれに準ずる学校に在学している方。

応募作品: 1人の高校生(自分自身をのぞく)を主人公とした、2~5枚の写真と文章(200字程度)。

締め切り: 2009年11月20日(金)

詳細は、<http://www.tjf.or.jp/thewayweare2/jp/> をご覧ください。

編集後記

http://www.tjf.or.jp/newsletter/kouki/kouki_j.htm

人と人をつなぐネットワークの重要性は誰しもが認めるところであるが、ネットワークが強固な組織に成長するまでにはいくつものハードルを越えなければならない。

本特集で紹介した教師ネットワークは、地道に自分たちの手でネットワークを築いていっている事例である。ネットワークの活動といってもさまざまな意味合いがあり、またネットワークの発展にもいくつかの段階があるように思う。

本特集でも記したように、第一段階は、教師が意気投合できる仲間と出会い、それぞれが抱えている悩みや関心、考え、問題意識、理想について語り合い、つながるという段階。お互いに情報を交換し、助け合い、啓発し合うことで生まれる共有意識や仲間意識が、孤軍奮闘してきた教師に充足感と活力をもたらしている。

第二段階は、ネットワークならではの教育交流が促進される段階である。ネットワークを通じて、教育関連情報の交流や教育実践・研究活動(授業設計や教材開発など)の相互啓発や協働開発作業、そして教師個人を超えて、学校や地域間の交流が促進される段階である。

第三段階は、ネットワークが一つの組織体として、地域や日本全体、ひいては海外も含めて、より広域の教育活動を推進したり、教育環境の変革に向けて運動を展開する段階である。

段階が進むにしたがってますます大きなエネ

ルギーが必要となり、中核となって活動してくれるメンバーが不可欠となる。しかし、小中高校の教師は多忙を極めていて、本来の教科指導に加えていくつもの任務が学内で課せられていることが多い。最近、教師は会合や事務に忙殺され研究活動に時間がとれなくなっていると聞く。

TJFは特集で取り上げたネットワークとこれまでさまざまな形で関わってきた。既存のネットワークと連携したり支援を行ったりして、側面からその活動を応援してきたネットワークもあれば、ネットワークの立ち上げに関与し、共に試行錯誤を重ね歩んできた事例もある。

しかし、子どもたちに対する深い愛情と見識をもち、使命感に燃えた教師を、事務面で、あるいは財政面で後押しすることで教育環境が改善されることに私たちがやりがいと喜びを感じてきた。一方、これらのネットワークでつながった教師からTJFは実に多くのことを学び、事業を推進するうえで助けてもらってきた。自分の生徒のためだけでなく、教育全体のために自らの時間と労力を費やしてくれる教師なしにはTJFの公益事業は成り立たない。TJFにとって教育的使命を共有できるネットワークはまさに宝物である。

中野佳代子

財団法人 国際文化フォーラム
THE JAPAN FORUM



国際文化フォーラム通信 84号
2009年10月発行

発行人・編集人 中野佳代子
デザイン・DTPオペレーション 飯野典子
フォーマット設定 鈴木一誌
出力・印刷・製本 凸版印刷(株)
校閲・校正(有)天山舎

財団法人 国際文化フォーラム

〒163-0726 東京都新宿区西新宿2-7-1
新宿第一生命ビル26階
TEL 03-5322-5211 FAX 03-5322-5215
E-mail: forum@tjf.or.jp
<http://www.tjf.or.jp/>